

# CrossCheck導入後の2ヶ月で気づかされた剽窃問題の緊急性

多田眞作

日本コンクリート工学会 英語論文誌Journal of Advanced Concrete Technology編集幹事  
secretary@j-act.org

## 1. はじめに

コンクリートは社会基盤を形成する主材料であり、コンクリート材料の化学・物理・製造、コンクリート構造物の理論・設計・建設・維持管理等に関わる研究者は世界に数多く存在する。IFを有する国際論文誌も14誌（学会誌8，商業誌6）以上あってしのぎを削っている。

弊誌は2003年に発刊し、10年目となる今年には印刷体の廃止、Editorial Managerの導入、CrossCheckの導入と大きな変化を経験した。剽窃問題はこれまで危機感を持って議論されたことはなかったが、CrossCheckの導入により意識は一変したと云える。

剽窃論文に対して他の学会はどのような事例をお持ちで、それに如何に対処されたのか…。筆者はそれを知りたいと願い、事例紹介の会合等はないのかとのメールを8月にJ-Stage関係者の方に出した揚げ句がこの結末である。その情報を知りたければまず自分が率先して発信せよとの教訓と受け止め、限定的な事例であるがご紹介させて頂く次第である。

## 2. 論文A (4月)

3月1日にF国より投稿のあった論文の著者の一人B博士は、以前に在籍していた大学のV先生やD先生の指導で、本論文の中心となる博士論文研究を取りまとめた。しかし今回の論文は、就職先の大学の教授が筆頭著者となり、前大学の指導グループは一切共著者になっていないところが問題だったようだ。共著者ではないため、査読者をV先生にお願いすることとなり発覚した。査読者V先生の言い分にも確認は必要であり、著者に直接聞いてみたところ、結局投稿を取り下げることとなった。

この例は、論文の元になるデータの不正使用であるが、著者間の著作権行使の問題であり、ジャーナルが主体的に処理できるものではない。論文自体にはオリジナリティもあり、テクニカル・クォリティも高ければ採択となってしまう可能性もある。たまたま発見できたが、この種の論文を水際で検出できる系統的方法はなさそうである。

## 3. 論文B (6月)

6月6日に、CrossCheck導入を急ぐきっかけになった、明らかな剽窃論文が発見された。4月27日にE国から投稿のあった論文が、編集委員会内部で2名の編集委員が査読している際に分かったもので、当然不採択を通知した。

これは日本の大学のM先生が、2001年のある国際会議に提出した論文を、E国の若手教員が丸写ししたものだと思われた。念の為、M先生に剽窃論文の著者と面識があるかどうか確認した結果、赤の他人と分り剽窃は決定的となった。

著者には、「本論文はM先生の会議論文の剽窃であることが明確であるため、不採択とする」、「今後あなたの投稿は受理しない」、の2点を通知した。ところがその後、思いも掛けぬことが起きる。

## 4. CrossCheckの導入(7月)

6月12日にJSTにCrossCheck導入申込書を送付し、7月2日にはWebベースのCrossCheckのアカウントを取得できた。早速ために問題の論文BをチェックするとSimilarity Scoreはわずか7%であった。これは2001年の国際会議論文が、CrossCheckが類似性を検討するためのデータベースに登録されていなかったことによるものと思われ、CrossCheckの限界といえる。（CrossCheckは全く会議論文を参照しないわけではない）

7月19日には、2月より稼働しているEditorial Manager (EM)とCrossCheckが連動する様になり、投稿時にCrossCheckにかけ、その結果はEM上で主査や編集委員長にも見えるようになった。Similarity Score 70以上を要注意としている。8月7日にはJ-Stage経由で自誌コンテンツのiThenticate DBへの収録をお願いした。

#### 5. 論文C (8月)

早くも8月1日に、Similarity Score が70以上の論文をCrossCheckが検出した。この論文はC国でポストドクをしている別の国の研究者が、A国の大学のWebに載っている修士論文を丸写したものであった。受理の前に著者に問い合わせ結果、著者は論文を取下げた。この著者はEM上の本人情報も自ら抹消していた。ここまでインターナショナルに文献が動くと、数名の査読者の手作業ではとても無理で、CrossCheckの有難さが分かって来た。

#### 6. 論文D (8月)

その後8月31日に、CrossCheckは新たにSimilarity Score 70以上の論文を検出した。もっとも類似度合いの高い論文 (41%) は同一著者の国際会議論文であったため、受理し査読を開始した。会議論文から相当程度研究を進展させ、その部分にオリジナリティがあれば採択もあり得るからである。

このような場合には、事務局は著書にその会議論文を請求することにしており、ほとんどの著者は快く送ってくれる。主査や場合により外部査読者もその論文を参照しながら査読をしている。但し、最近「自己剽窃」が問題視されている。自分の過去論文であるため、倫理上の問題は無いとしても、前論文出版社の著作権の侵害は問題となる場合がありそうだ。

#### 7. 論文E (9月)

9月16日に、こともあろうに論文Bの著者から再び投稿があった。

前回とは名前がわずかに違っていたので、E国の別の先生に確認する一方、連絡先のメールアドレスは同一だったので、本人と同一と定し、受理しないことを通知した。前回の不採択通知の際の英語が通じていなかったのかと云う心配はあるが、恐らく著者は厚顔無恥の性格なのではないだろうか。今回投稿した論文のSimilarity Score が17%であり、どうやら剽窃論文ではないらしいことだけが救いである。

ところが更に調べると、論文Bは2重投稿され、他誌 (Journal of Civil Engineering and Construction Technology、IF無し) で今年の6月に出版されていた。驚くべきことに、原論文の著者のM先生が共著者に名を連ねており、その所属はアラブの実在する研究所だが、いかにも怪しい研究室名になっていた。

#### 8. 剽窃論文著者の人間像と盗用されやすい論文

剽窃確定論文はまだ3本に過ぎないが、これらの著者に共通するものを挙げてみた。同時に、狙われる論文に関する傾向が読み取れる。

剽窃論文の著者の人間像は

村社会とは一線を画す所属関係の自由さ、継続勤務の不確かさの中に身を置く。

ネット上のフルテキスト論文の検索に長けている。

原論文を周到に細工することなく、手間を掛けない荒っぽさがある。

短期間で結果を要求される厳しい雇用関係、国情がある。

また狙われる論文は、

全文がネットで公開されている修士・博士論文、国際会議論文など。

日本人の国際会議論文。(結構質の良いものが論文誌に限らず国際会議にも投稿されるから) 原論文が、論文誌掲載論文に比較して査読の甘い論文が多いのだとすれば、ジャーナル側では剽窃と知らずに普通に査読しても不採択になるか、なっていた場合も多いのではないだろうか。

## 9. 数値データや写真のCrossCheckの可能性

CrossCheckはテキスト間の類似を調べることができるが、それはテキストがデータとして与えられるから可能になる。写真やグラフは「出力」されるから機械にとって比較が難しい。印刷物にせよPDFにせよ一幅の絵に出力されるのだから盗用を検知する手段は限られてくる。そこで、全てデータの形で論文を公開すれば剽窃の可能性は低くなるだろう。

例えば写真はオリジナルのraw dataで撮影日付、位置情報等を保持したものを、ネット上の写真レポジトリに登録する。グラフのデータはepsであればASCIIで記述されている。これらはCrossCheckの対象にならないだろうか。図・表・写真と文章は全く別にそれぞれの専門レポジトリに投稿し、論文本体はそのURLにリンクし、画面出力をコントロールするプログラムとなる。勝手な想像にすぎないが近未来の論文はその様なものになるのではないか。

## 10. 終わりに

CrossCheckの導入のアナウンスが、剽窃論文投稿の抑止力になるだろうとの甘い考えは、次々に投稿される剽窃論文によって打ち砕かれた。導入後わずか3ヶ月だが、剽窃論文が既にそこにあるものとして実感された。

ならば、過去10年にどれだけ剽窃論文が投稿されていたのか、その一部は採択され刊行されたのではないかという疑念に苛まれる。過去の刊行論文をCrossCheckに通してみたい気がするが、パンドラの箱を開くことになるのかもしれない。

弊誌はまだ剽窃問題の全体像を把握するに至っておらず、結論的なことは何も無いが、この事例が何かのお役に立てるのであれば幸いである。

## 参考文献

ACT-Journal of Advanced Concrete Technology, <http://www.j-act.org>

COPE-Committee on Publication Ethics, <http://publicationethics.org>

Copyright Clearance Center, <http://www.copyright.com>

CrossCheck, <http://www.ithenticate.com>

iThenticate, The Ethics of Self-Plagiarism,

<http://www.ithenticate.com/Portals/92785/media/ith-selfplagiarism-whitepaper.pdf>